

開館20周年記念企画展を開催

当館の開館20周年を記念し、平成26年10月25日から11月30日の会期で『もの』からのメッセージ～有形民俗資料が語る生活文化～展を開催しました。

展示にあたり、民俗考古学の研究者である名久井文明さん(物質文化研究所一芦舎代表)から「民俗考古学からみた北上山地の民俗技術」と題した論文を寄稿いただきました。この論文では、北上山地で行われてきた木の実を長期保存して利用する技術、樹皮を剥いたり抜いたりして利用する技術、木を木口から割り始める技術、籠類を形成するための技術について、遺跡から出土した遺物と現代の民俗例に見られる共通性を示しながら、これらの技術が縄文時代から途切れることなく受け継がれてきたものであるということを説明しています。本企画展では、この寄稿論文に基づいて、北上山地はもとより全国の市町村教育委員会や博物館等からさまざまな資料をご提供いただき展示を行いました。展示した有形民俗資料と遺跡から出土した遺物がそっくりで、その技術が縄文時代までさかのぼることを一目で見て取ることができました。また、有形民俗資料を研究することで、古い時代の人々の暮らしぶりを読み解くことができるということもわかりました。

あわせて展示では、館の20年間のあゆみを振り返り、これまで多くの皆さんにご協力いただいていた当館の調査活動や記録作成作業の様子を写真パネルで紹介しました。

また、開館記念日にあたる11月1日には名久井文明さんを講師に、「民具が秘めた力と、その活用」と題した講演会を行いました。講演では、記念企画展に関連して有形民俗資料に見られるさまざまな技術が縄文時代にまでさかのぼることについて解説していただきました。あわせて、教科書に出てくる民俗資料や工芸品として販売されているものがあるなどの事例から、有形民俗資料や地域に伝わる伝統的な生活技術についての今後の活用の方向性についても話がおよび、それらに対応していくことが当館にとっての急務であることが理解できた、とても意義深い講演会になりました。

なお、本企画展の元となった名久井文明さんの寄稿論文「民俗考古学からみた北上山地の民俗技術」は右の図録に掲載しております。若干の残部がありますので、詳細は当館までお問い合わせください。



開館20周年記念企画展の様子



講演会「民具が秘めた力と、その活用」講師の名久井文明さん



開館20周年記念企画展
図録

『「もの」からのメッセージ
～有形民俗資料が語る
生活文化～』

—図録目次—

開館20周年記念企画展の開催にあたって

1. 教育資源としての文化財 名久井芳枝(名誉館長)
2. 宮古市北上山地民俗資料館の活動内容
あゆみ 資料収集活動 情報収集活動 記録保存活動
教育普及活動 研究活動について 協力者
3. 寄稿論文
「民俗考古学からみた北上山地の民俗技術」名久井文明
Ⅰ 木の実を利用する技術 Ⅱ 樹皮を剥いて利用する技術
Ⅲ 木を木口から割る技術 Ⅳ 植物生素材を使った平面形成技術 Ⅴ 籠類を作る技術 Ⅵ 民俗例と出土遺物—時空を隔てた共通性が意味するもの—
4. おわりに

問い合わせ先 ☎0193-76-2167 北上山地民俗資料館

素材の性質を巧みに使い分けた樹皮製品

宮古市北上山地民俗資料館名誉館長
名久井 芳枝

講演を聞いて考えたこと

開館二十周年の記念講演会で名久井文明氏による「民具が秘めた力とその活用」を拝聴した際、資料館に収蔵され、展示されている「もの」の中には、遙か縄文時代にまでも遡る技術を内包している「もの」があることを知り、資料館の資料群が日本人の文化を考える上でかけがえのない文化財であることが裏付けられた気がした。1986年に民俗資料を通して「もの」の本質に迫るべく、実測作図の方法論を体系化し『実測図のすすめ』を著した私には、その話ほどれも聞き漏らすことができなかつたが、特に、樹皮製素材が製品として作り上げられていく過程で、樹皮の性質を巧みに駆使する技術の話には吸い寄せられた。その理由は、実測作図の仕事は、「もの」の「素材」「構造」「製作技術」「外形」の情報を図面化し、製品を図上分解しながら「もの」の命に向き合う作業であるため、私とは逆の方向から緻密な実験を繰り返しつつ至った研究成果は、実測作図の不足部分を補完する上からも重要なものだと考えたからである。

「裏見せ横使い」への質問

講演後、樹皮製素材の技法を説明するため名久井文明氏によって名付けられた「裏見せ横使い」(写真1)の手法が製品に用いられた理由について、質問が寄せられた。名久井文明氏は「20年前からこの手法について詳細を知る方を捜してきたが出会えず、聞き取り調査ができなかつた。自分の推測になるが、この手法は細い樹木からでも径の大きい器を製作できると共に、内皮側に樹皮が丸まろうとする(戻ろうとする)力を逆利用することで、より正円に近い円形を作りやすかつたためと思われる」と制限時間の中で簡単に答えられた。実はこの部分は論文一つが書けるほどに重要であり、実際に作った方からお話を聞けなかつた現在、それを証明するために研究者は念には念を入れて答えたい部分であつたらう。この折、そうした器の実測図を何点か描いた経験のある私は、幾つかの資料を思い出していた。

「もの」の本質に近づく手法

実測図を描く際、これまでは正確な情報を提供して下さる方がおられる資料を優先して作図に取り組んだ。しかし現在ではお話を伺う機会が少なくなっている。やがて、研究者は「もの」を分析するという限られた方法で情報を得るしかない時代に直面していくのは自明の理だが、実測作図法は「もの」の四要素の情報を先入観なく読み取る手段であり、「もの」に対して無知の研究者にも知識が蓄積される方法である。ゆえに未来にこそ必要とされる手法だと考えているが、同時に、今回「民俗考古学からみた北上山地の民俗技術」の企画展を見学し、かつ講演をお聞きした

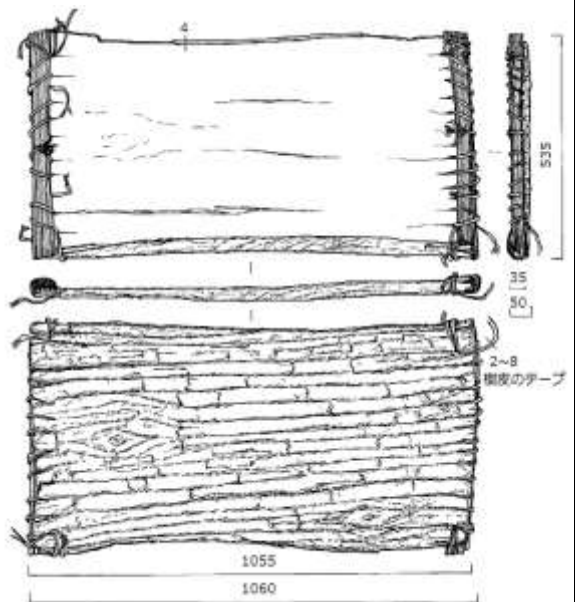
結果、「もの」の本質に迫っていくためには、さまざまな方法が試みられる必要があり、実験もまた欠かせない手法だと強く感じた。

素材の性質を巧みに使い分けた樹皮製品

名久井文明氏の研究と、私が実測図を描いてきた上で得た一致点は、「素材の性質を巧みに使い分けた樹皮製品」という点にある。そこで次に樹皮製品を実測作図することで、私が「もの」から教えられたことをご紹介します。



写真1 アワ乾し籠
所蔵・写真提供 花巻市総合文化財センター



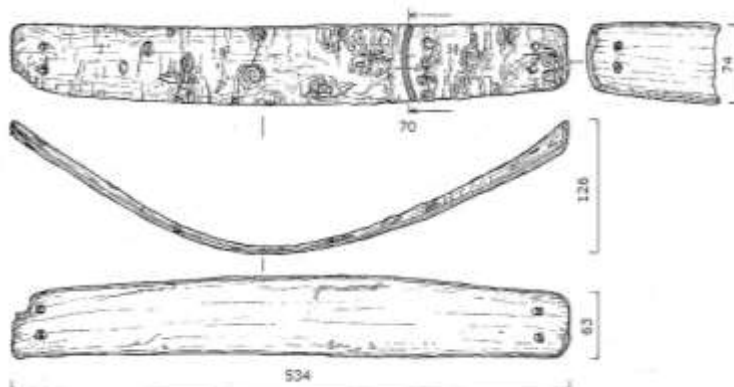
実測図1 かぼとうか 館蔵
作図者 名久井芳枝

【かぼとうか】(実測図 1)

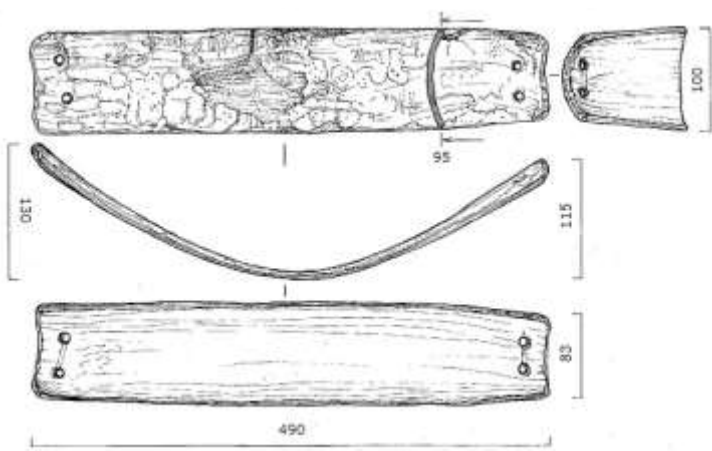
この資料は国指定の重要文化財で養蚕の飼育用具にも使用された。ヤス(サワグルミ)の皮でできており、北上山地の他地域でも当たり前で使用されていた。養蚕ばかりでなく、木の実や「うむしたヒエ」を「火だな」で乾燥させる際に使用した。「かぼとうか」の殆どが、表皮側が真っ黒に煤けていることで炉の上の「火だな」に置かれていたことが実証できる。また形態は表皮側を表にして長方形に形作られているが、短辺の両端は、カヤ状の束と共に細く裂いた樹皮製素材で巻きとめられ、樹皮が内皮側に戻ろうとする力を抑えると共に、30~50mm 程の側壁を築いている。長辺の両端には人為的な加工はなく、樹皮が内皮側に戻ろうとする力をそのまま利用して側壁としている。こうして見事に側壁のあるお盆状の「とうか」が形作られ、木の実やヒエを乾燥させる機能をもった製品が必需品として人々の身近で活躍した。

【腰板(腰当て)】(実測図 2・3)

この資料も国指定の重要文化財である。宮古市川井の地域では「はったぎ」あるいは「はたあし」などと呼ばれていた「地機」を使用する際、台に掛けた経糸を張る作業で重要な役目を果たす。両端に紐を取り付けた「腰板」は女たちの腰に当てられ、経糸を若干巻き取った「もと押さえ棒」の両端に取り付けられる。ピンと張った経糸の「あや」の間に緯糸が通り、それを「杼(刀杼)」でトントン引き締める作業を続けると織物が仕上がっていく。それゆえ目の揃った美しく丈夫な織物を織るためには、経糸がピンと張られていなければならない。「腰当て」は女たちの強い力を直に受け止めた工具である。こうした知識を得て観察すると、当然の事ながら「腰板」の両端には紐を通す孔が穿たれている。形ほどの「腰板」も表皮を内側にしておき、その面がくぼむ形で湾曲している。この表皮が何故内側になっているのか、私は大変興味深く思っているが、聞き取り調査による情報はない。肉体に沿って湾曲を得たいならば、表皮を外側にすれば簡単に湾曲が得られる。しかしその場合の縁辺部は先の「かぼとうか」の側壁のような状態になりかねず、女たちの腰に著しい違和感を覚えさせただろう。表皮を内側にすることによって腰に当たる部分に縁辺部ができない。実測図 2・3 の右側面図には、はっきり内皮側に戻ろうとする力が記録されている。この内皮側に戻ろうとする性質は、一方で、渾身の力を込めて経糸を張った「もと押さえ棒」から伝わる力を、より力強く受け止める事を可能にしたのではないかと考えている。私が実測した「腰当て」にはこの他に藁製や布製の紐で平面的に組んだものがある。これらが、樹皮製の「腰板」に比べて女性の腰にどれほど優しい感触であったかは想像に難くない。かつて樹皮製の「腰板」が活躍した地域は、藁や繊維の素材が入手しにくい地域だったのではないかと想像している。



実測図2 腰当て 館蔵
作図者 名久井芳枝



実測図3 腰当て 館蔵
作図者 名久井芳枝

今回とりあげた 3 点の樹皮製品は「樹皮が立木であった時代に戻ろうとする力」を巧みに利用していた。他方樹皮製素材で作られた「編み籠」「組み籠」には、樹皮に秘められた様々な性質が巧みに利用されている。そうした性質を縄文時代の人々がしっかり認識していたことを、今回の企画展「民俗考古学からみた北上山地の民俗技術」では目に見える形で教えてくれた。実測図を作製する者にとっては示唆に富む企画展であった。

水車小屋が寄贈されました

小国地区の高屋喜多男さんから寄贈された水車小屋が小国分館に移設されました。工事は地元の職人組合に依頼し、「小国分館友の会」の皆さんに運搬や曳家などの作業にご協力いただきました。今後は博物館資料として保存していくとともに、実際に水車を使って脱穀や製粉を行い、地域の郷土食作りのような体験学習に活用していきます。希望者にもご利用いただけるよう整備する予定です。



水車を運ぶ様子



水車小屋の移設状況

館務実習生の受け入れ

9月23日～25日までの3日間、岩手大学人文社会科学部の学生2名が学芸員資格取得のため、実務実習を行いました。実習では、川内地区の佐々木富治さん、アキさんご夫妻からの聞き取り調査や、企画展の展示パネルの作成を行ったほか、湯澤武さん、キヌ子さんご夫妻から作り方を教わりながらワラぞうり作りを体験しました。

実習を終了して寄せられた感想の一部を紹介します。

「昔の道具が登場する教科書に載っている話は他にもあるので、こうした道具に触れてみる経験をすることで学びがより深まるのだろうと感じた。」（日本史専攻 高橋友さん）

「地域の資料館を充実させるためには地域の方の理解、協力が何より重要であるということ強く感じた。」（法学専攻 蛭名絢子さん）



ワラぞうり作りの様子



聞き取り調査の様子

ご協力ありがとうございました!!

資料寄贈(平成26年3月～平成27年2月)

阿部重喜様 荒田ヤヨエ様 河内敬子様 佐々木富治様
 沢口幸次様 高瀬屋豊造様 田鎖宗吾様 中沢要様
 中村和子様 中村精様 中村繁昭様 中村文男様 中村恵美様
 古館たみ様 古館忠三郎様 八木勇太様
 江紮地域振興センター様 小国小学校様

聞き取り調査協力(平成26年4月～平成27年2月)

佐々木アキ様 佐々木富治様 中村文男様 湯澤武様
 湯澤キヌ子様 湯澤孝様 湯澤ヨネ様
 江紮地区高齢者学級参加者の皆様 宮古社会福祉協議会川井支所「ゆいとリサロン」参加の皆様(尻石、大畑、大仁田、湯沢)



◆江紮地域振興センター寄贈【くめんだけ】。
 ロビーに展示していますので、手にとって遊んでみてください(解けるかな?)。

体験教室など～有形民俗資料を活用した事業～

「年中行事と郷土食」では、小国地区の高齢者の皆さんを先生に、小学生ら30人が参加しました。ワラで作ったウマを神社にお供えし、行事食の豆しつとぎを試食する体験をしました。「どうやって使ったの?」は昔の道具や郷土食などについて、地域の経験者の皆さんに実演を交えてお話いただき、その様子を記録するというものです。今後、館で実施する体験学習などに活用していきます。また、冬休み工作講座「クルミの木の皮を使ったミニかご作り」には小学生8人が参加しました。「あめ玉を入れよう」「布をかぶせるとかわくなるかも」など楽しい感想が聞かれました。ほかにも、「技術の伝承」をテーマにした当館の体験メニューでは、見学に来た小学生たちが「すご編み台でコースター作り」などの小物作りを体験しました。



「ウマっこつなぎ」



「どうやって使ったの?」



「冬休み工作教室」



体験メニュー「すご編み台でコースター作り」

古文書解読講座を開催

初心者向けで、今年度で3回目の開催となりました。市史編さん室の假屋主査を講師に、歴史用語や南部藩の制度などを学びながら地域の古文書資料の解読を進めました。全3回の日程でしたが、

「毎回新しいことが学べて有意義だった」「月1回でもいいのでゆっくりやってほしい」などの感想が寄せられました。



古文書解読講座の様子

今年度の入館者数(2月末現在)

(人)

一般	高校生・学生	小・中学生	団体	合計
609	10	82	151	852

来館者の感想(メッセージノートより)

- ・映像展示室でもの作りのビデオを見て、人の知恵とは素晴らしいものだと感じました。(大阪から見学に来られた方より)
- ・展示量の多さに驚きました。貴重なものの数、維持管理も大変だと思いますがもっと多くの人に広めて見てもらいたいです。(東京都から見学に来られた方より)